

平成 21 年 6 月 29 日現在

研究種目： 基盤研究（C）

研究期間： 2006～2008

課題番号： 18520145

研究課題名（和文） 日本古代神話・伝説と琉球神話・伝説の比較研究

研究課題名（英文） The comparative study of Japanese ancient myth and Ryukyu myth

研究代表者

真下 厚（MASHIMO ATSUSHI）

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：50209425

研究成果の概要：

日本古代の神話・伝説と琉球の口承及び文献化された神話・伝説とを比較して研究することによって、日本古代の資料からはうかがい得ないような、地方の口承神話・伝説が資料化され、国家の地理書に汲み上げられてゆく過程を具体的に明らかにし、そこから日本古代の文献に記載された神話・伝説の位置を想定した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	500,000	0	500,000
2007年度	300,000	90,000	390,000
2008年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総計	1,000,000	150,000	1,150,000

研究分野：国文学・文化人類学（含民族学・民俗学）

科研費の分科・細目：人文学・文学

キーワード：国文学

1. 研究開始当初の背景

本研究代表者はかつて「文字の世界の向こうへ」（『古代文学』第40号「小特集・古代文学研究の現状と展望」、平成13年3月）において上代文献の文字世界の向こうに広がる口頭（「声」）の世界を解明するために今日なお世界各地に生きている口頭伝承の生態についての調査・研究を重ね、そこから

導かれる結果を材料として比較研究する方法を提言し、『万葉歌生成論』（三弥井書店、平成16年）において声と文字の表現について一般的に論じた。

いうまでもなく、日本古代の神話・伝説は文字に記載されて伝えられ、それは文字表現によっていどられている。本研究代表者は『風土記逸文注釈』（上代文献を読む会編、

翰林書房、平成13年)において「伊勢国号(一)」「比治真奈井奈具社」の項を担当執筆するなかで文字表現についての考察を行ってきた。その後、長年従事してきた琉球(奄美・沖縄)の口頭伝承調査・研究にもとづいて「声の神話の生態 沖縄宮古諸島からの素描」(『伝承文化の展望—日本の民俗・古典・芸能—』三弥井書店、平成15年)、『声の神話 奄美・沖縄の島じまから』(瑞木書房、平成15年)、「南島の伝説」(『解釈と鑑賞』第893号、平成17年10月)を公表し、琉球の口承神話・伝説の生成や伝承などの生態について明らかにしてきたところである。

こうした成果を踏まえて、日本古代の神話・伝説と琉球の神話・伝説について文献学的研究と口頭伝承研究とを総合した比較研究を構想することとなった。

2. 研究の目的

本研究は『古事記』『日本書紀』『風土記』などの上代文献に記載されている日本古代の神話・伝説について、琉球王朝時代の歴史書や地理書などに記載されたり今日まで口頭で伝えられたりしてきた神話・伝説と比較研究することによって、その特質やはたらき、伝承の生態などを照射しようとするものである。

もちろん、日本古代の神話・伝説と琉球の神話・伝説とは時間的にも空間的にも隔たったものであり、直接的な関係をもつものではない。しかし、日本古代社会も琉球の近世から現代までの社会もシャーマニズム的な精神風土を有するという点で類似する。神話・伝説の生成にはシャーマン的な人々が関与していると考えられるのである。そしてまた、日本古代国家においては『日本書紀』などの歴史書や『風土記』という地理報告書が作られ、近世の琉球国家においても『中山世鑑』

『中山世譜』『球陽』などの歴史書や『琉球国由来記』などの地理書が作成された点でも類似している。この琉球国家においては『琉球国由来記』のもととなった『御嶽由来記』などの地方資料や今日にまで伝わる口頭の神話・伝説資料まで存在しており、地方に伝承される口頭の神話・伝説がどのように国家の地理書のなかに取り入れられることになったかという具体的な様相を明らかにすることができるのである。

そこで、こうした二つの類似する文化に属する神話・伝説についてその異同を比較することによって日本古代の神話・伝説の特質やはたらき、伝承の生態などを明らかにしたいと考える。かつて「文字の世界の向こうへ」(『古代文学』第40号「小特集・古代文学研究の現状と展望」、平成13年3月)において提言し、また「書評・工藤隆著『四川省大涼山イ族創世神話調査記録』」(『日本文学』第52巻第12号、平成15年12月)でも述べたことであるが、日本古代文学研究においてはこうした口頭(「声」)の伝承研究をも含み込んだかたちでの比較研究が必要であろう。

3. 研究の方法

本研究における日本古代の神話・伝説と琉球の神話・伝説との比較は次の4点を軸として進めてゆくものとする。

- ・ 王朝神話としての比較
- ・ 王朝神話・伝説と地方神話・伝説との関わりについての比較
- ・ 地方資料にみえる神話・伝説と国家の地理書にみえる神話・伝説との比較
- ・ 口頭の神話・伝説と地方資料にみえる神話・伝説との比較

これは日本古代国家と琉球国家との王朝神話レベルでの比較、そしてそれぞれの神話・伝説における国家レベルと地方レベルと

の差異の比較を行い、さらに琉球の神話・伝説において地方で口承されていたものが地方資料に記録され、国家の地理書に編纂されてゆく、というそのいくつかの段階を比較しようとするものである。そのことによって、日本古代神話の王朝神話としての特質やはたらきなどについて照射することができよう。また、限定された資料しか残されていない『風土記』の地方神話・伝説について、その特質や伝承の生態、編纂過程などを推定することが可能になるものとする。

4. 研究成果

前記「研究の方法」の . から . までの項目のうち、 . から . への順に考察を進めた。

琉球神話・伝説における . . . の項目についての研究では、最も豊かに伝承されてきた地方である宮古諸島の神話・伝説を対象とした。

. の項目では、その最初の地方資料である『御嶽由来記』（18世紀初頭）についての本文研究を行い、今日に伝わる口頭の神話・伝説との比較研究を行った。この書物は25の御嶽の由来、1つの祭祀の由来などを記すが、口頭の神話・伝説と内容を同じくするものは4つの御嶽の由來說話、1つの祭祀の由來說話である。口頭の神話・伝説の段階では、その表現は身体表現を交えた躍動的なもので、多様な叙述の仕方をとる。動作の主体を明確にせず不可思議さを強調し、また前文のことは次の文の初めに繰り返すなどのようなものである。これに対して、地方資料の段階である『御嶽由来記』は口頭の神話・伝説を素材として作成したが、そこには文字に備わる思想があらわれる。それは儒教道徳や神仙譚的色彩などである。そのことによって、それに合わないような口頭の神話・伝説のモチーフを改変して叙述したりもし

ている。また、その表現では時・所を明確にしたり、類型表現を多用して登場人物の心情を詳述するなど具体的、詳細なものとしている。さらに、その世界観は宮古島を中心とする部分を残しつつ、口頭の神話・伝説ではみられない琉球王府との位置関係が打ち出されている。こうした関係は日本古代の風土記においても想定される。

. の項目では、地方資料である『御嶽由来記』と琉球王国の地理書『琉球国由来記』との比較研究を行った。『琉球国由来記』は『御嶽由来記』などの地方資料を編纂資料としており、その内容・叙述は『御嶽由来記』のそれとほぼ一致する。しかし、その世界観は『御嶽由来記』の時間・空間がおおよそ宮古島を中心としたものであるのに対し、『琉球国由来記』では琉球王府を中心とする世界観によって貫かれ、琉球国家の歴史・地理のもとに統一されている。また、『琉球国由来記』では『御嶽由来記』にみられる生硬な表現を慣用的な表現や的確な表現に改めている。

. の項目では、宮古諸島の地方資料『宮古島記事仕次』と琉球王国の歴史書『中山世鑑』『中山世譜』『球陽』との比較研究を行った。『宮古島記事仕次』には神託として宮古島の創世神話が記録されている。「天からの土砂による島造り」「原夫婦天降」「土中より始祖」というモチーフをもつものであるが、琉球王国の歴史書には全く取り入れられていない。創世神話はそれが伝承されている地域を世界の中心として説くものであるから、王朝独自の創世神話をもつ琉球王府では採録すべきものではなかったからであろう。日本古代においては、地方の創世神話は在地豪族出身の官人たちによる『出雲国風土記』に国土の起源を説く「国引き神話」として記載される。この神話は韻律ある詞章の面影を留めるもので祭祀のなかで朗読されたと考

えられるが、それは奄美ユタの呪詞と同様シャーマン的な人々によって神から授けられたとして生み出されたものであったろう。その他『常陸国風土記』などにも「天地分離巨人」型創世神話の痕跡がみえるが、国家の歴史書『日本書紀』や『古事記』にはみられない。これはこれらの歴史書の成立が風土記撰進の詔に先立つものであったことによるのはいうまでもないが、琉球王国の場合と同様中央の歴史書では採録すべきものではなかったからでもあったろう。

の項目においては、日本古代の王朝神話と琉球の王朝神話との比較研究を行い、その共通点と相違点とを明らかにすることによって、日本古代の『日本書紀』『古事記』にみえる王朝神話の特徴を浮かび上がらせることができる。貴種漂着や日光感精の神話モチーフをもつ琉球王朝始祖神話と日本古代の王朝始祖神話とがその比較対象となるが、この検討は今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

真下厚「奄美ユタの呪詞と昔話」(『昔話研究と資料』日本昔話学会、2009年、41頁から48頁まで)、査読有。

真下厚「説話表現の変容 声の神話・伝説と『御嶽由来記』と『琉球国由来記』と」(『説話・伝承の脱領域 説話・伝承学会25周年記念論集』岩田書院、2008年、269頁から288頁まで)、査読無。

真下厚「神司に聞く」(『星砂の島』第11号、全国竹富島文化協会、2008年、35頁から42頁まで)、査読無

真下厚「エイと結婚する話」(『学術情報』第60巻第3号、日本学術振興会、2007年、140頁から144頁まで)、査読無

真下厚「『御嶽由来記』と声の神話・伝説と」(『論究日本文学』第86号、立命館大学日本文学会、2007年、1頁から11頁まで)、査読無。

真下厚「沖縄的神話と祭祀」(『口承文学と民間信仰』雲南大学出版社、中国、2007年、165頁から171頁まで)、査読無

〔学会発表〕(計1件)

真下厚「昔話と語り物 巫覡の祭文をめぐって 奄美ユタの場合」日本昔話学会平成20年度大会、2008年7月6日、北星学園大学

〔図書〕(計2件)

上代文献を読む会編『高橋氏文注釈』(翰林書房、2006年、真下厚担当執筆は154頁から164頁まで)

日本口承文芸学会編「沖縄の民間神話」(『シリーズことばの世界1 つたえる』三弥井書店、2008年、真下厚担当執筆は129頁から141頁まで)

6. 研究組織

(1) 真下 厚 (MASHIMO ATSUSHI)
立命館大学・文学部・教授
研究者番号：50209425

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者